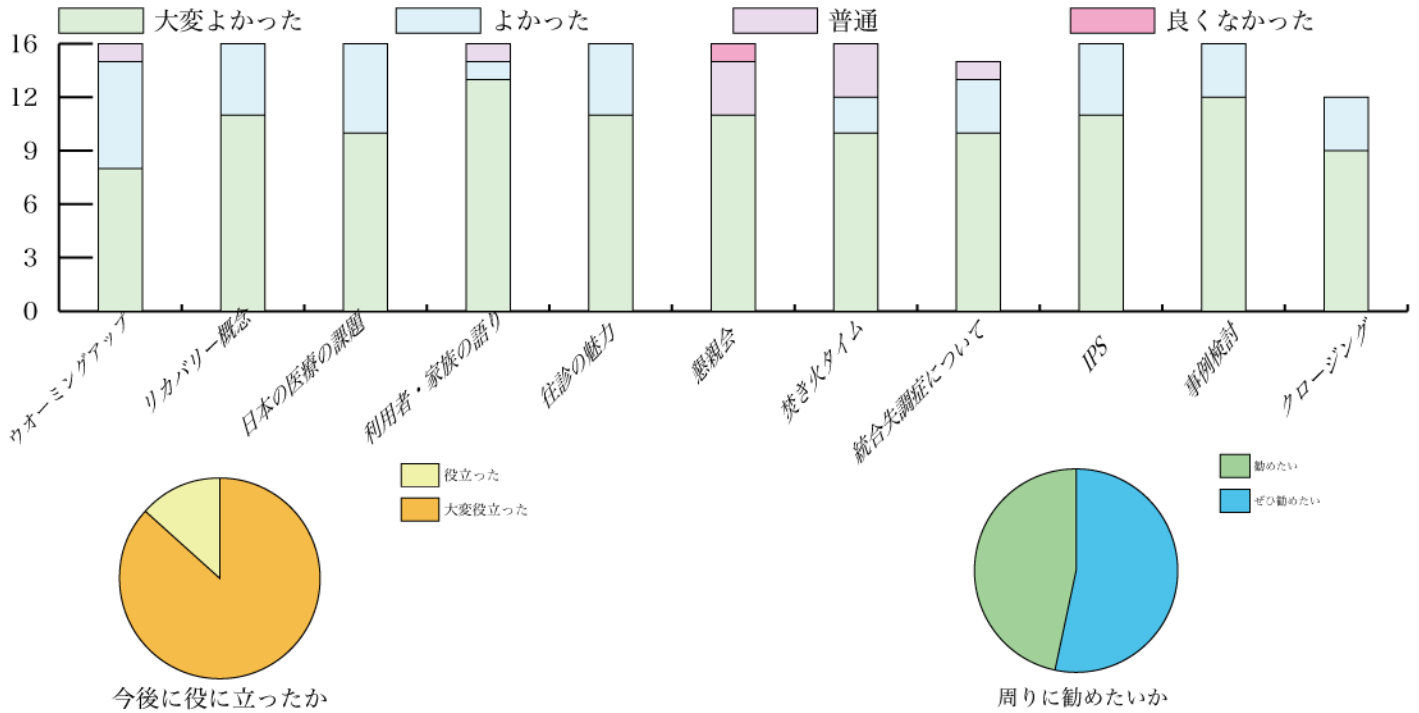


統計・アンケート



参加者の声

地域住民から疎まれ、病院の中に収容される精神病患者ではなく、地域の中で主体的に生活できる患者像はとても素敵ですし、その方が治療成績がいいというのも納得できる。患者さんもアウトリーチを積極的に広げてほしいとおっしゃっていたし、私自身そのような医療に主体的に取り組みたいと思った。(1年 学生)

医療行為だけでなく、人間としての対話からの信頼構築が必要だということを忘れないようにしたい(4年 学生)

一人ひとりの患者さんに根気強く全力で向き合うことが何より大事なのだということを最も感じた。ご家族の「人が人を助けるのだ、人間を深めてほしい」という言葉が印象に残っており、もちろん制度の整備や知識の習得などは不可欠なものだとは思いますが、目の前の人のためにできることをするという気持ちが根底に必要なのだと感じた。(6年 学生)

参加前に知っていた事項(例えばリハビリやストレングスなど)でも、実例を伺ったりしていると自分がいかに(理想としていても)臨床の中で意識できていないか、ということに気付かされた。このことは参加後の臨床に非常に活かされていると感じている。(専攻医2年目)

EBMや基礎研究は大事だが、一方でこれまでの精神科医療を担ってきた先生方の人間的な熱い想いを聴く機会は少なくなってきたように思った。また、後期研修はほとんどが精神科病院で過ごすため、「病院で患者が来るのを待つ」スタイルが当たり前と思っていた自分に気づかされた。(専攻医3年目)

リハビリ、アウトリーチの魅力といったお話を聞く中で、改めて今の日本の精神医療が抱える問題を痛感し、自分の活動を見つめ直す時間になった。(若手医師)

医師になるための過程や医師であることは確かに自分のアイデンティティの一つではあるが、その前に、あるいはその先に、互いに一人の人間同士として受容し合うことが真の地域共生のために必要なことのように改めて感じた。(若手医師)

話を聞く中で、これからの精神科の未来は明るいなあと感じました。今回ここに参加できなかった多数の先生方にもこの気持ちを共有できたらよいなと思います。(専攻医の参加を応援して下さった病院医師)

開催者感想

アウトリーチが当たり前に行われる未来を若いみなさんに繋ぎたいと、日本財団のご協力をいただいて行った企画でしたが、参加者の皆さんが、柔らかくどんどん吸収していかれる姿は圧巻でした。皆さん、真剣に、医療を、日本の未来を考えていて、初めて会ったにもかかわらず、深夜まで語り合った部屋もあったようでした。本研修後、アウトリーチの現場への就職を決められた先生もいらっしゃったという嬉しい報告も届いております。

2025年は、違う県で、今回の参加者からいただいた学びを得て、さらにブラッシュアップして開催する予定です。医学生、研修医・専攻医はもちろん、指導医の先生方もぜひご参加いただき、一緒に学ばせていただくとありがたいです。次回の広報は2025年春を考えておらず、次報をお待ちいただくか、アウトリーチネットHPをご覧ください。広報をご協力いただいた先生方、本当にありがとうございました。(渡邊真里子)

